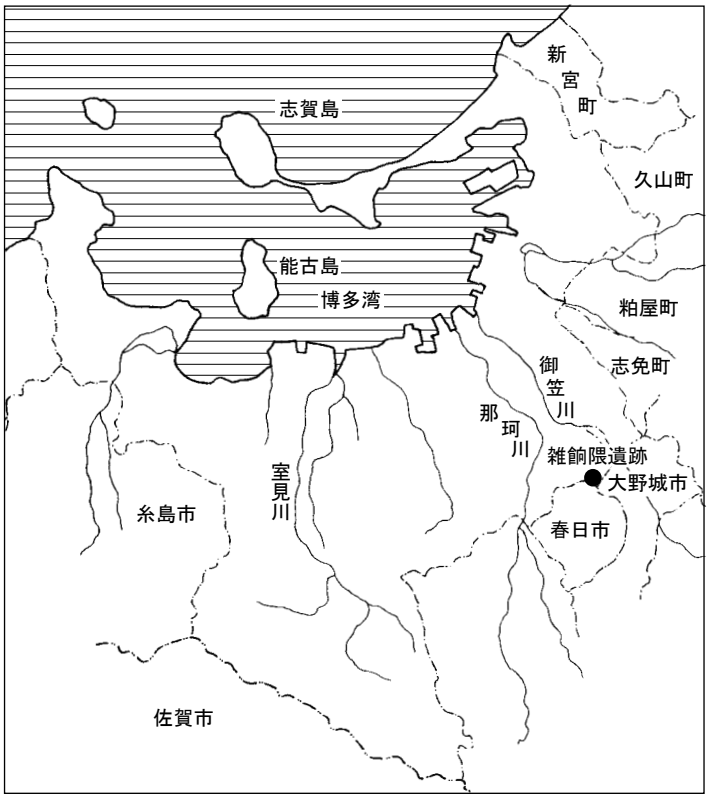
雑餉隈遺跡8

―雑餉隈遺跡第 19 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1282 集



遺跡略号 ZSK-19
調査番号 1429

2016

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入れ口として古来より繁栄して来ました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。

雑餉隈遺跡が所在する博多区南部の昭南町・新和町一帯は奴国の王都がある春日市に隣接する地域です。公共交通機関の便はよく、古くから開発が行われ、都市化が進んでいる地域です。

本市においては、各種開発事業によって、やむを得ず失われる埋蔵文化財については発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

本書は、戸建住宅建設に先立って、平成26年度に実施した雑餉隈遺跡第19次調査の成果を報告するものです。調査では古代の竪穴住居跡を検出しました。近隣の調査区でも同時期の竪穴住居跡が見つかっており、一帯に古代の集落が存在することが分かりました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者のディー・アンド・エイチ株式会社様をはじめとし、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成 28 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

凡　例

⑴　本書は、福岡市教育委員会が平成 26(2014) 年度に福岡市博多区昭南町 2 丁目17 番で実施した発掘調査の報告書である。
⑵　発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄が行った。
⑶　遺構実測と遺物実測は山崎が行い、出土遺物の整理・収蔵作業については古賀美江が行った。
⑷　遺構・遺物の撮影は山崎が行った。
⑸　本書に使用した図面の浄書は山崎が行った。
⑹　本書に使用した方位は磁北であり、真北とは 6°18′西偏する。
⑺　出土金属製品の保存処理ついては埋蔵文化財センター上角智希が行った。
⑻　土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
⑼　調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
⑽　本書の執筆・編集は山崎が行った。

雑餉隈 19 次調査情報

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
ZSK-19	1429	福岡市博多区昭南町2丁目 17 番	80.76 ㎡	45 ㎡	戸建住宅建設	2014.10.06 ～10.20	山崎龍雄

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
1 調査に至る経緯 …… 1
2 調査の組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 2
1 調査の概要 …… 2
2 遺構と遺物 …… 2
3 小結 …… 9

挿　図　目　次

Fig.1　調査区周辺の遺跡（1/25,000） …… 2
Fig.2　調査区位置図（１/5,000） …… 3
Fig.3　遺構全体図（1/80） …… 4
Fig.4　調査区周辺の地形（1/200） …… 4
Fig.5　SC06・14、SX15（1/60） …… 5
Fig.6　SC06 出土遺物Ⅰ(1/3) …… 6
Fig.7　SC06 出土遺物Ⅱ(1/3・1/4) …… 7
Fig.8　SC14、SK19、表採出土遺物（1/3） …… 8

写　真　目　次

PL.１　(1) 東側全景（東から）(2) 西側全景（東から） …… 10
PL.２　(1)SC06 遺物出土状況（南から）(2)SC06 完掘状況（南から）(3)SC06 竈の状況（南から）
(4)SC14 東側（南から）(5)SC14 西側（西から）(6)SC14 竈の状況（東から）
(7)SX15 防空壕西側（東から） …… 11
PL.３　SC06 出土遺物（縮尺不統一） …… 12

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は同市博多区昭南町２丁目 17 番に戸建住宅建設の為の埋蔵文化財の有無についての照会（事前審査番号 26 - 2 - 493）を平成 26(2014) 年 9 月 8 日付けで受理した。これを受けて埋蔵文化財調査課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地の雑餉隈遺跡に含まれていることで、確認調査を実施した。現地表下 15 ～ 45 ㎝で遺構を確認し、遺構の保全などについて申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。その後、平成 26 年 9 月 26 日付けでディー・アンド・エイチ株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年 10 月 6 日から発掘調査を開始した。調査は 10 月 20 日まで実施し、翌平成 27 年度に資料整理および報告書作成を行った。

２．調査の組織

調 査 委 託　ディー・アンド・エイチ株式会社

調 査 主 体　福岡市教育委員会（発掘調査：平成 26 年度、資料整理・報告書作成：平成 27 年度）

調 査 総 括　文化財部埋蔵文化財調査課長：常松幹雄
同課調査第１係長：吉武　学（26 年度）
同課調査第２係長：榎本義嗣（27 年度）

庶　　務　埋蔵文化財審査課　管理係長：内山広司（26 年度）
：大塚紀宜（27 年度）
管理係　：横田　忍（26・27 年度）

事 前 審 査　埋蔵文化財審査課事前審査係長：佐藤一郎（26・27 年度）
主任文化財主事：池田祐司（26・27 年度）
同課　文化財主事：比嘉えりか（26 年度）
：大森真衣子（27 年度）

調査・整理担当　埋蔵文化財調査課文化財主事：山崎龍雄

整理・発掘作業員　古賀美江、上野美智子、緒方圭子、久保サヨ子、中島秀司、野内聖司、山下直美

Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境（Fig.1）

本章については本市報告『雑餉隈遺跡４』（第 569 集､1998 年）を基にして、他報告の記述も交えて雑駁ではあるが述べる。雑餉隈遺跡の東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南部に位置する。地理的には春日丘陵の東辺にほぼ並行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方向から多くの谷が入り込んで枝分かれしており、この舌状台地ごとに、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、麦野 A ～ C 遺跡などの遺跡が分布する。

本遺跡で最古の遺物は、旧石器時代の石刃・剥片などの遺物がある。各地点で出土しており、遺跡が広く分布すると思われる。縄文時代については明確ではないが、縄文期の石鏃が後世の攪乱から出土している。弥生時代になると遺構・遺物は急激に増加し、各地点で遺構が確認される。14 次調査『雑餉隈遺跡５』（第 868 集、2005 年）では弥生時代早期の夜臼系の弥生土器を伴う土坑や、有柄式の磨製石剣や磨製石鏃が副葬された木棺墓が見つかっている。古墳時代は遺構・遺物は不明であるが、古代になると遺構・遺物は急増する。雑餉隈の地名は現在の大野城市に雑餉隈町として残る。調査地点がある昭南町は麦野村に属する。『福岡県の地名』（2004 年平凡社）によると、雑餉隈の地名の由来は江戸時代の編纂物『筑前国続風土記』には、大宰府官人の雑掌（元来は諸官の雑務を司る者）がいたことによるといわれる、明治時代の『福岡県地理全誌』では雑賞隈（享和二年『明細記』）、雑掌隈とも記されるとある。確証は出来ないが、古代の官衙的な大型建物群が北側の麦野 A 遺跡で見つかっており、広い範囲で古代の竪穴住居跡が見つかっている。中世以降の時

期は遺構の検出は少ないが、２kmほど北の麦野Ａ遺跡地点で戦国期の堀で囲まれた館跡が、大野城市山田の御笠の森遺跡（註１）では、堀で区画された屋敷群が見つかっている。『豊前覚書』（註２）では麦野村に要害を築いたとある。古代官道や、近世は日田街道が通る交通の要地であり、街道沿いに村落が分散して分布していたものと思われる。

Ⅲ　調査の記録

１．調査の概要（Fig.１～４、PL.１）

本調査区は雑餉隈遺跡の南西部、JR 南福岡駅より約 400 m南に位置する。春日から伸びる低丘陵上に立地し、標高は現地表で約 21 mを測る。調査区南側には第 12 次調査、少し離れた北側には第 16 次調査地があり、両地点で奈良時代の竪穴住居が検出されている。調査は調査区を東西２分割して行った。調査はまず東側から行い、その後廃土を反転し西側の調査を行った。基本層序は遺構面までは東側地表下５cmほど、西側は緩やかに下傾し、その上に黒色の包含層が堆積する。遺構面は鳥栖ローム面である。主な検出遺構は竪穴住居跡２棟、太平洋戦争時の退避壕（防空壕）１基、ピット群など。竪穴住居跡の時期は奈良時代である。

２．遺構と遺物

①　竪穴住居跡（SC）

SC06（Fig.５～７、PL.2-1～３・３）

調査区北東隅で検出した住居跡。確認規模は長軸長 2.7 m以上、短軸長２m以上、深さ 0.3 mを測る。床面は貼床で、壁下には溝が巡る。壁溝は西側で二重に巡る状況を示し、建替えの可能性がある。竈は北西壁沿いにあり、西側に 40 cmほど突出させ、その内側には竈袖の粘土が残る。竈前面はピット状に窪む。埋土は黒褐色土を主体とし、灰白色粘土や焼土・炭化物を含んでいた。住居内には灰白色粘土ブロックが集中する所がある。床面密着の遺物はなく、東側壁沿いで床面より浮いた状態であり、住居廃絶後投棄された状況を示す。東壁土層を見ると上面から掘り込んだような土壌の変化があるが、一部の調査のため、詳細は不明である。

Fig.1　調査区周辺の遺跡（1/25,000）

1. 雑餉隈遺跡　2. 南八幡遺跡　3. 麦野Ａ遺跡　4. 麦野Ｂ遺跡　5. 麦野Ｃ遺跡　6. 三筑遺跡　7. 笹原遺跡　8. 井相田Ａ遺跡
9. 井相田Ｃ遺跡　10. 井尻Ｂ遺跡　11. 岡本遺跡群　12. 須玖遺跡群

出土遺物は奈良時代の須恵器、土師器が出土する。**1**～**22**は須恵器。**1**～**6**は蓋。いずれも口縁端部が屈曲し、天井部に摘みが付く。調整はいずれも天井部外面はヘラケズリ、その他は回転ナデで、内面はナデ。**1**は上～中層出土。頂部に釦状の摘みが残る。歪むが、口径11.7㎝、器高2.8㎝を測る。色調黄灰色で、胎土は精良。**2**は扁平な蓋の口縁部1/6片。復元口径13.0㎝を測る。色調は暗灰色で、胎土は精良。**3**は北東側下層出土。1/6片で復元口径14.6㎝を測る。器壁は摩滅し、調整は不明。色調は灰色、胎土は精良、焼成やや不良。**4**は北東側下層出土。釦状の摘みがある。色調灰色、胎土は精良、焼成は良好。**5**は南西部の中層と**SP02**出土。1/4片で復元口径15.0㎝を測る。色調は灰色、胎土は精良、焼成は良好。**6**は北東側上層出土の扁平な大型の蓋1/8片。復元口径23.0㎝を測る。色調は灰色、胎土は1～2㎜白色粒子多く混入。**7**～**11**は高台付坏。調整の基本は体部回転ナデ、外底部はヘラケズリで、ナデを加える。**7**は東側で出土。1/2弱片。復元口径13.6㎝、器高4.1㎝を測る。色調は褐灰色で、胎土は白色微粒多く含む。**8**は南西隅中層出土。1/3片で復元口径14.3㎝、器高3.3㎝を測る。色調は灰黄色、胎土は精良。**9**は上層出土。底部1/4片。復元高台径11.6㎝。色調は灰オリーブ色、胎土は精良。**10**は上層出土。1/3片強。底が深く、復元口径15.5㎝、器高5.6㎝を測る。器壁は雑な仕上げ。色調は灰黄色で、胎土は精良。**11**は北東側下層出土。1/6片で復元口径15.2㎝を測る。調整はヨコナデ、色調は灰黄色で、胎土精良。**12**は北東側上層。鉢で1/6片。復元口径19.2㎝を測る。色調は灰黄色、胎土は精良。**13**は東側で出土。壺の底部片。外底部ヘラケズリ、体部は丁寧なナデ。高台畳付には下に敷いた敷物痕が残る。色調は内外面灰色で、胎土白色微粒子含む。**14**･**15**は壺。**14**は竈前面で出土。肩部はカキ目。斜め平行叩き痕残る。内面ヨコナデ。**15**は**14**と同一個体と思われ、上層～下層バラバラで出土。外面上半カキ目、下半木目直交叩き、内面はヨコナデで、同心円状当て具痕残る。色調灰黄色で、胎土は精良。**16**～**18**は皿。**16**は竈前面で出土。底部片で一部口縁部残る。復元口径19.4㎝。器高2.4㎝を測る。器壁は摩滅し調整不明。色調は灰白色、胎土は精良。**17**は北東部上層出土。1/6片で、復元口径21.2㎝、器高2.3㎝を測る。器壁は摩滅するが、外底部はケズリ。色調は灰オリーブ色、胎土は金雲母微粒子含む。**18**は竈下層、前面出土の破片が接合。高台が付く皿か盤底部。復元高台径18.1㎝を測る。

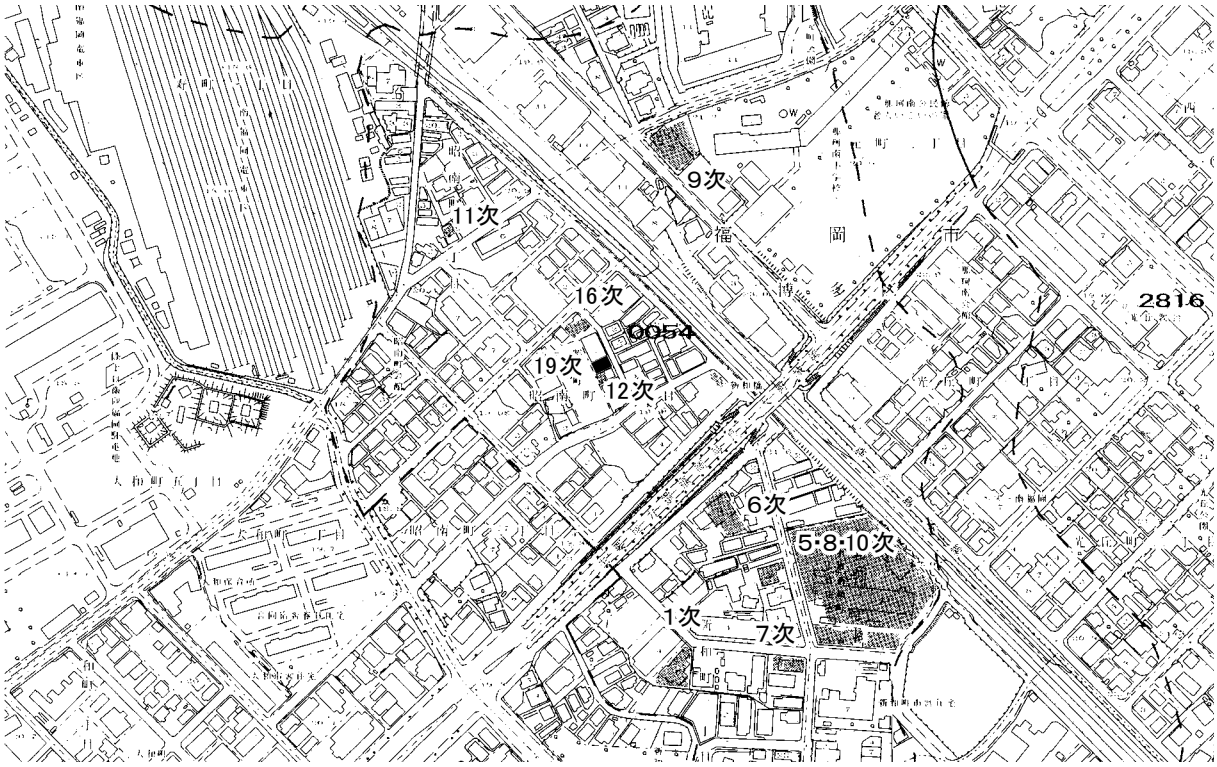


Fig.2　調査区位置図（1/5,000）

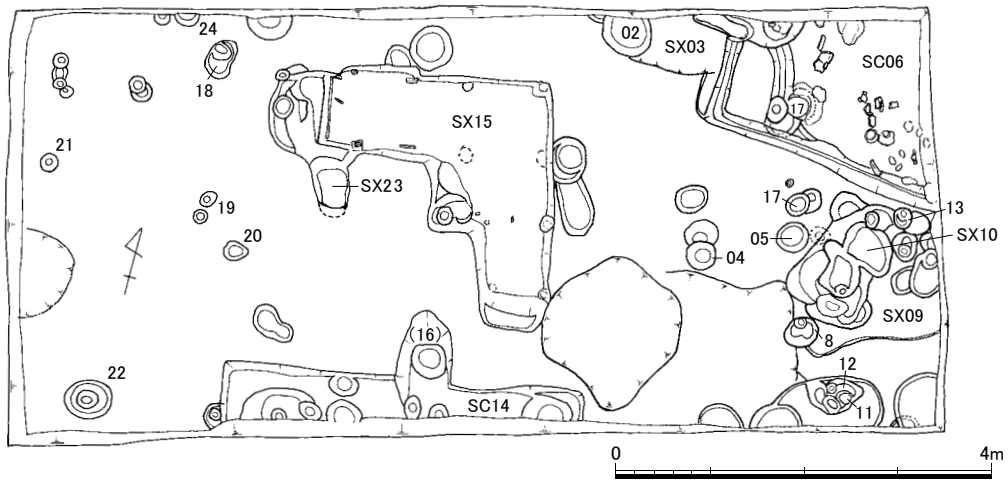


Fig.3　遺構全体図（1/80）

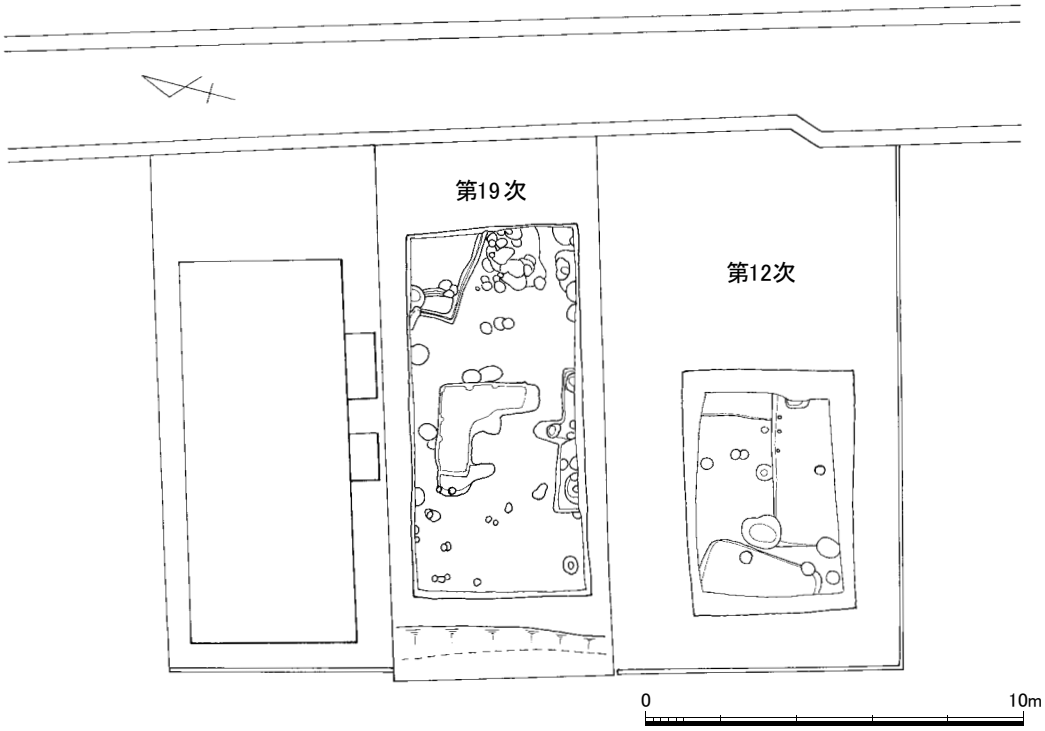
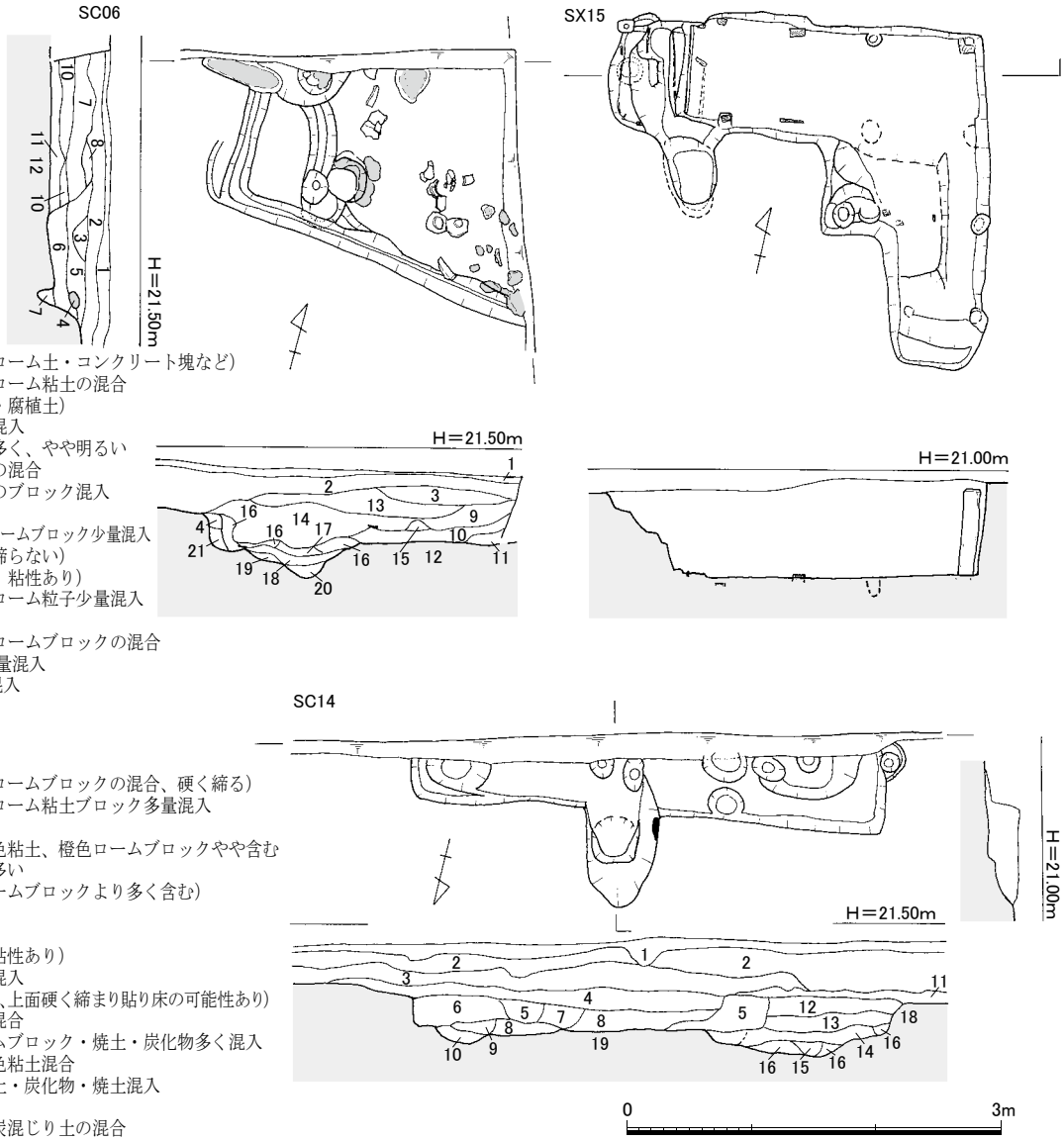


Fig.4　調査区周辺の地形（1/200）



SC14 土層名称
1．客土（砕石・砂）
2．客土（黒色土・橙色ローム土・コンクリート塊など）
3．黒色土と鈍い赤褐色ローム粘土の混合
4．黒色土（粒子細かく・腐植土）
5．4に橙色ローム少量混入
6．5よりロームの混入多く、やや明るい
7．橙色ローム粘土と4の混合
8．橙色ローム粘土に4のブロック混入
9．黒色土（6より暗い）
10. 灰黄褐色土に9と橙色ロームブロック少量混入
11. 暗い黒褐色粘質土（締らない）
12. 黒色土（粒子細かく、粘性あり）
13. 黒褐色粘質土に橙色ローム粒子少量混入
14. 橙色ロームブロック
15. 黒褐色粘質土と橙色ロームブロックの混合
16. 14で黒褐色粘質土少量混入
17. 13に14小ブロック混入
18. 橙色ローム粘土

SC06 土層名称
1．客土（砕石・砂）
2．客土（黒色土・橙色ロームブロックの混合、硬く締る）
3．黒褐色粘質土に橙色ローム粘土ブロック多量混入
4．灰白色粘土
5．黒褐色粘質土で灰白色粘土、橙色ロームブロックやや含む
6．5よりロームの混入多い
7．壁周溝（6で橙色ロームブロックより多く含む）
8．3に近く土器片含む
9．5よりやや暗い
10. 黒色土（粒子細かく粘性あり）
11. 9と橙色ローム土の混入
12. 橙色ローム粘土(地山、上面硬く締まり貼り床の可能性あり)
13. 黒色土と黒褐色土の混合
14. 黒褐色土に橙色ロームブロック・焼土・炭化物多く混入
15. 焼土ブロックと灰白色粘土混合
16. 灰白色粘土に黒褐色土・炭化物・焼土混入
17. 黒褐色粘質土
18. 焼土ブロックと黒色炭混じり土の混合
19. 橙色ローム粘土ブロックに20を混入
20. 黒色粘質土（18との境に焼土層を挟む）
21. 橙色粘土ブロックと黒色土ブロックの混合
22. 黒色土
23. 22に地山橙色ローム土少量混入

Fig.5　SC06・14、SX15（1/60）

外底部ケズリで、全体はナデ。色調は灰色、胎土は精良。**19** は東壁沿い出土の高坏 1/3 片。坏部が皿状を呈す。復元口径 23.7 ㎝を測る。坏部外底はヘラケズリ。その他の調整はナデ。色調は灰黄色、胎土は 1 ㎜内白色砂粒含む。**20** は東側で出土。甕胴部片。外面自然釉がかかり、密な平行タタキ、内面当て具痕が残る。色調はオリーブ黒色で、胎土は白色微粒子少量混入。**21・22** は竈内出土。**21** は蓋天井部片。天井外面はヘラケズリ、その他はナデ。色調は灰色、胎土は精良。**22** は皿 1/6 弱片。復元口径 16.2 ㎝、器高 2.0 ㎝を測る。器壁は摩滅があるが、外底部は丁寧なケズリ、体部はヨコナデ。色調は灰黄色を呈し、胎土は精良。

23 ～ **28** は土師器。**23** ～ **26** は甕。**23・24** は北東部下層出土。**23** は甕の口縁部小片。内外面ハケ目。色調は灰色から橙色、胎土は 2 ㎜内外砂粒多く混入。**24** は頸部 1/5 片。外面ハケ目、内面ヘラケズリ。**25** は中層出土。口縁部 1/6 片。復元口径 19.8 ㎝を測る。外面ハケ目、内面はヘラケズリ。色調は灰色、胎土は 1 ～ 2 ㎜砂粒多く含む。**26** は竈前面出土。大型の甕上半部 1/4 片。復元口径 30.8 ㎝を測る。体部外面タテハケ目、内面は口縁部ヨコハケ目、体部はヘラケズリ。色調は鈍い黄橙色、胎土は 2 ～ 3 ㎜石英・長石粒子多く含む。**27・28** は焼塩土器。**27** は竈前面出土。いずれも 1/3 片で、**27** は復元口径 12.2 ㎝、器高約 7 ㎝を測

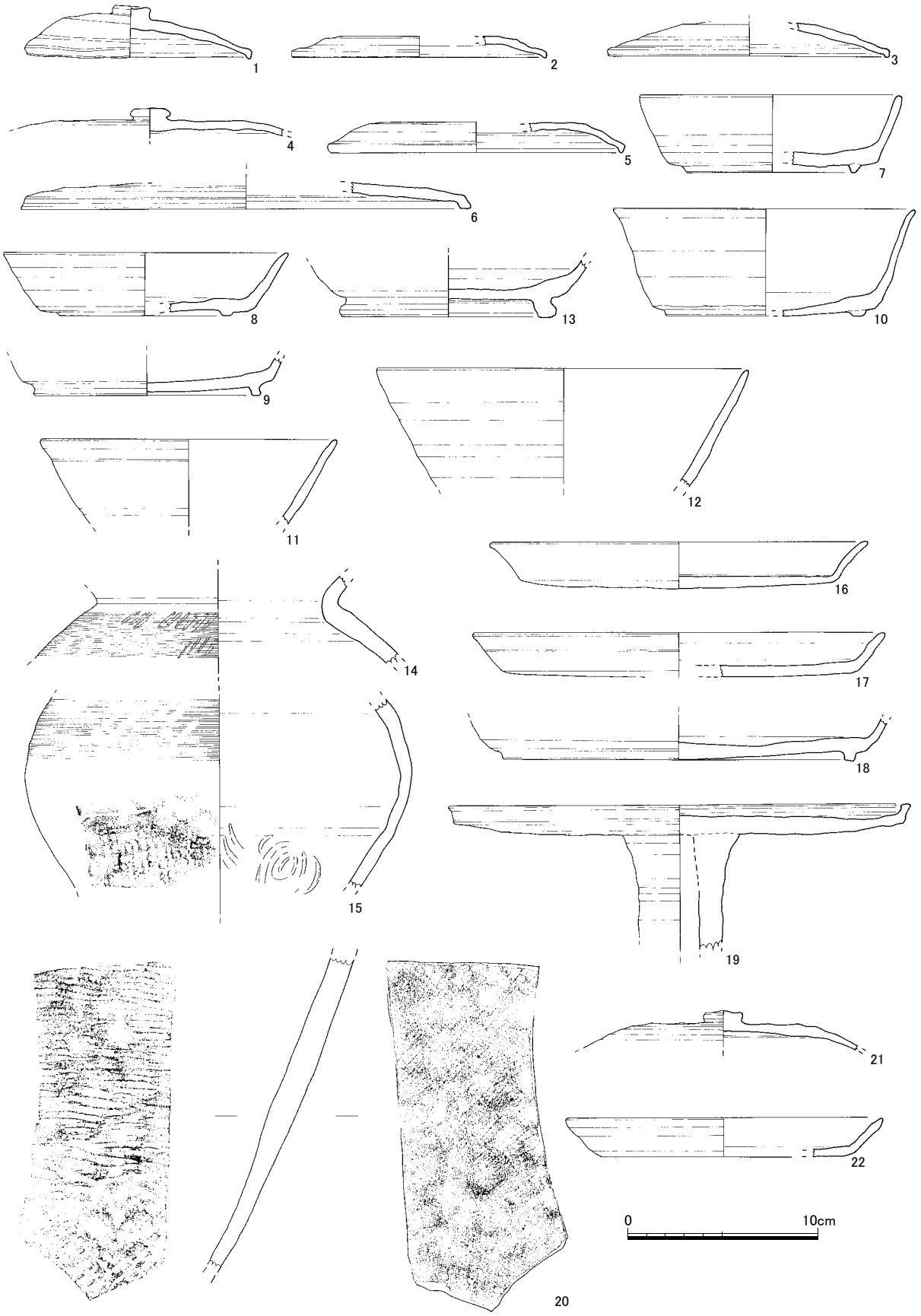


Fig.6　SC06 出土遺物Ⅰ（1/3）

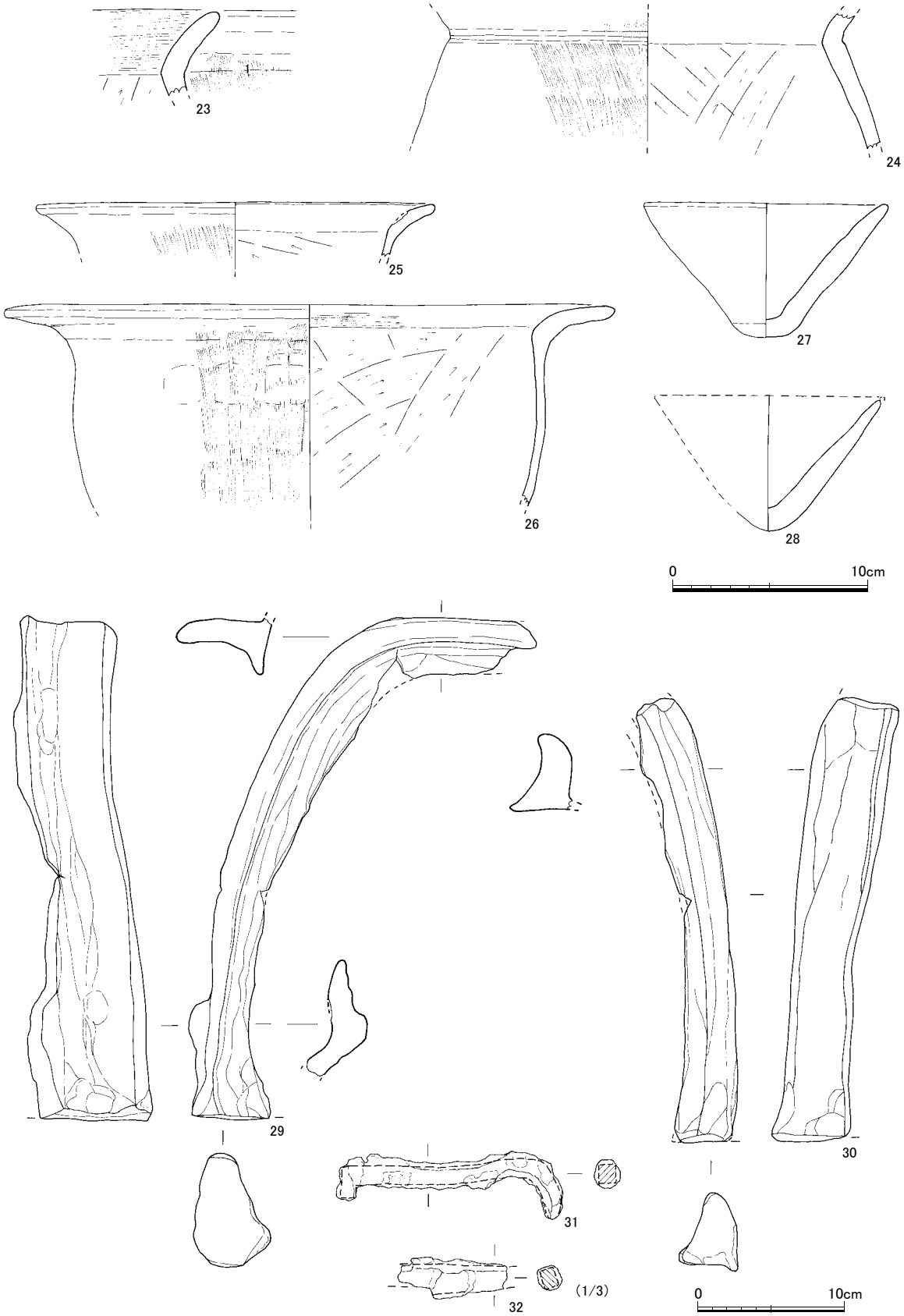


Fig.7　SC06 出土遺物Ⅱ（1/3・1/4）

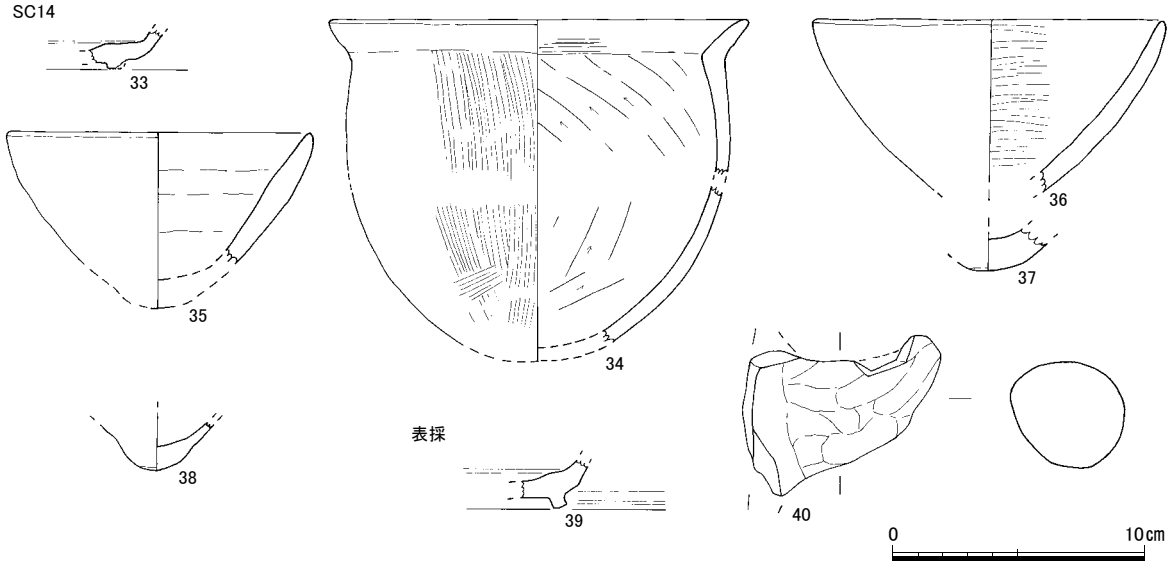


Fig.8　SC14 表採出土遺物（1/3）

る。**28** は口径約 12 ㎝、器高 7 ㎝弱。器表面は摩滅し調整は不明。色調は **27** は橙色、**28** は鈍い赤褐色を呈し、胎土は 1 ～ 2 ㎜の石英・長石粒子多く混入。**29・30** は移動式竈の庇部分。調整は外面ナデで、内面はケズリ。色調は橙色で、底部は黒ずむ。胎土は石英・長石粗砂粒を多く含む。**31・32** は鉄製品。いずれも竈下層出土。**31** は鎹状に両端が曲がる。全長 7.6 ㎝を測る。錆がひどいが断面は方形。径は約 0.6 ㎝。**32** は不明鉄片。残存長 3.6 ㎝。全体に錆がひどいが断面は方形。径は 0.6 × 0.5 ㎝。

SC14（Fig.5・8、PL.2-4 ～ 6・3）

調査区南壁で検出した。大半が南隣の第 12 次地点にあるが、12 次地点では検出されておらず、規模は大凡ではあるが、確認長が東西 3.83 ｍを測り、一辺 4 ｍ内に収まると推定する。壁面の残りは 0.2 ｍを測る。埋土は黒色土または黒褐色土で、下層は橙色ローム粘土ブロックとなり、貼床面があった可能性があるが、狭い調査範囲で確証はない。北側中央に竈があり、0.8 ｍ突出する。竈自体は壊されているが、内部は焼土ブロック混じり土で、床面はピット状に窪む。壁は一部焼けている。住居にテラス部分があるとすれば、北側に大きくなる可能性がある。

出土遺物は土師器・須恵器が出土するが、量は少ない。**33** は須恵器の高台付坏底部小片。調整はナデ。色調は黄灰色を呈し、胎土は精良。**34** は小型の甕。竈部分の破片と合成復元。復元口径 16.3 ㎝を測る。体部外面は粗いタテハケ目で二次的に被熱。内面は口縁が粗いヨコハケ目、体部はヘラケズリ。色調は鈍い赤褐色を呈し、胎土は 1 ～ 2 ㎜石英・長石粒子多く混入。**35** ～ **38** は焼塩土器。いずれも尖底の形態である。**35・36** は底を欠く口縁部片。いずれも歪みがあるが、推定で復元。**36** は 1/8 片で、**35** よりやや大型か。調整は、いずれも外面は摩滅がひどく不明。内面はヨコナデ。色調は明褐色・明赤褐色で、胎土は 1 ～ 2 ㎜の石英・長石粒子を含む。**37・38** は底部片で、**37** は **36** と同一個体かは不明。器表は摩滅し、調整は不明。**38** の内面は焼けたのか赤くなっている。焼塩土器は竈内から出土しており、この部分で塩が焼かれた可能性がある。

② 防空壕（SX）

SX15（Fig.5、PL.2-7）

調査区中央部で検出した防空壕（退避壕）。L 字形の形態で東西 3 ｍ、南北 2.7 ｍ、幅 0.8 ～ 0.9 ｍ、残存深さ 0.75 ｍを測る。現地表から測っても深さは 1 ｍ程である。壁沿いには天井を支えた支柱の木柱や痕跡のピットが残る。入口は西側で、横板で階段を造っている。大人が身を隠す位の深さで、天井上部を土で覆

うが、直撃弾、火災などにあったら一たまりもなかったであろう。同様の防空壕は周辺でも確認されている。近くに軍需工場「九州兵器」（現在の渡辺鉄工所の位置、註 5）があり、周辺も当然空襲を受けたのであろう。廃棄後の戦後の遺物が若干出土しているが、ここでは図示しない。

③　表採遺物（Fig.8）

39 は須恵器の高台底部片。色調は黄灰色で、胎土は 1 ～ 2 ㎜石英・長石粒子混入。**40** は土師器把手片。色調は鈍い黄褐色を呈し、胎土は 1 ㎜内外白色粒子少量含む。

３．小　結

本調査区で検出した遺構は古代の竪穴住居跡２棟である。主軸方向は異なり、両者に時期差が認められる。時期的には８世紀奈良時代のものである。SC06 は前半から後半の遺物があり、出土状況を見ると廃棄された状況を示すことから、遺物の時期幅はそれを示している。南側の第 12 次地点（註 3）と比較すると、SC06 は 12 次の SC01、SC14 は SC02 と主軸が同方向である。報告では SC01 が 8 世紀前半、SC02 が 8 世紀後半と位置付けている。従って、本地点の住居も８世紀前半の SC06 が廃絶したあと、後半に SC14 が建てられたのであろう。SC06 の焼塩土器は､SC14 のものと同形態で､SC14 の居住人が SC06 に廃棄したものと推定する。第 5･8・10 次調査地点の第 101・102 住居（註 4）でも出土例がある。102 は突出した竈を持つ形態で、塩を専業的につくる人の住居である可能性がある。

参考文献

註 1　御笠の森遺跡は大野城市山田に所在する遺跡。1988 年の福岡県教育委員会による調査以来、大野城市教育委員会によって度々調査が行われ、縄文時代～近世初期に至る、各時代の遺構が調査されている。

註 2 『豊前覚書』は元和元年（1615）に旧筥崎座主で立花家の家臣であった城戸清隆が、父豊前守知正の物語や自らの見聞体験などを記したもの。

註 3　福岡市教育委員会『中南部（7)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 783 集　2004 年

註 4　福岡市教育委員会『雑餉隈遺跡 4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 569 集　1998 年

註 5　川口勝彦・首藤卓茂『福岡の戦争遺跡を歩く』有限会社 海鳥社　2010 年

PL. 1

（1）東側全景（東から）

（2）西側全景（東から）

（1）SC06 遺物出土状況（南から）

（2）SC06 完掘状況（南から）

（3）SC06 竈の状況（南から）

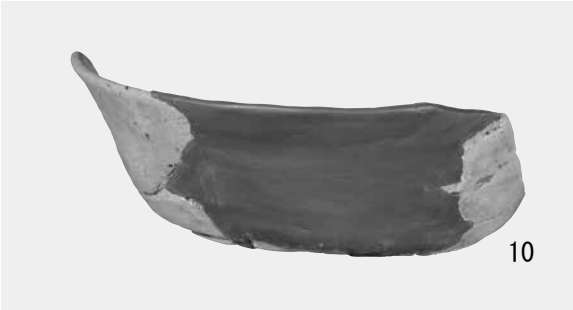
（4）SC14 東側（南から）

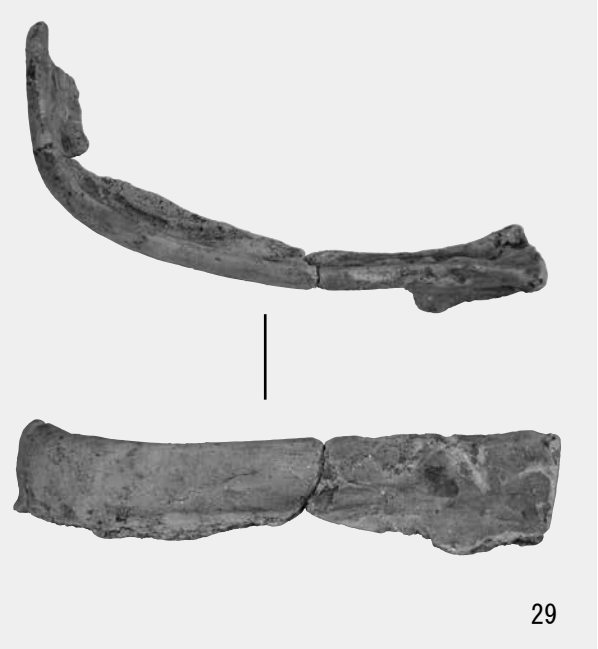
（5）SC14 西側（西から）

（6）SC14 竈の状況（東から）

（7）SX15 防空壕西側（東から）

PL. 3





SC06 出土遺物（縮尺不統一）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ざっしょのくま
書　　名	雑餉隈８
副 書 名	第 19 次調査報告
巻　　次	雑餉隈８
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1282 集
編 集 者 名	山崎龍雄
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目 8番１ 号 TEL092-711-4667
発行年月日	西暦 2016 年３月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ざっしょのくまいせき 雑餉隈遺跡 第19次調査	ふくおかしはかたくしょうなんまち 福岡市博多区昭南町2丁目 17 番	40134	020054	33度33分 44秒	130度20分 5秒	20141006　～ 20141020	45	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雑餉隈遺跡 第19次調査	集落	古代	竪穴住居跡	古代須恵器・土師器	

要　約	狭い調査区ではあったが、奈良時代の竪穴住居跡２棟を調査した。いずれも竈がつく。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1282集

雑餉隈遺跡8

－雑餉隈遺跡第19次調査報告－

平成28年3月25日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　株式会社宣巧社
福岡市博多区吉塚８丁目７－30